

# 「コロナウイルス」後の 新しい文化交流を願って

高坂 節三

## パンデミックとラテンアメリカ

2019 年末以来、中国で発生した新型コロナウイルスの蔓延は世界中に大きな衝撃を与えている。イタリアをはじめ多くの EU 諸国、ロシア、中東、インドそして北アメリカに拡大し、いずれ南半球のラテンアメリカやアフリカに広がるだろうと言われ始めた矢先、既にブラジルでコロナウイルスが広がっているとの報道があり、あっという間に罹患者の数は米国について世界で 2 番目になっている (5 月 31 日現在)。さらにアマゾン奥地の原住民にまで罹患者が出ているとの報道がある。今後、この流行がラテンアメリカにどのような影響を与えるのだろうか。

## インカ帝国崩壊と『銃・病原菌・鉄』

世界の歴史上で、ラテンアメリカが優れた文化を築き上げ、大きな力を持っていたのはインカ帝国であった。「1953 年、ピサロは人口数百万のインカ帝国を征服するために、168 人の兵士を引き連れてペルーの海岸に上陸した。彼にとって幸運なことに、またインカの人びとにとって不運なことに、

1562 年頃に陸路経由でインカ帝国に達した天然痘が、皇帝ワイナ・カパックとその後継者をふくむ多くのインカ人の命を奪っていた。…当時ラテンアメリカ最大のインカ王国が崩壊したのは、同王国に存在していなかった銃や鉄の影響もさることながら、病原菌の影響が強かったとして、その書物に『銃・病原菌・鉄』という題名をつけた」とジャレッド・ダイヤモンド氏は言う (草思社 2000 年)。彼は、人類史を自然史の知見と結び付け、地球的視野で、環境と歴史を結び付けつける新たな人類史の地平を開き、ピューリッツアー賞を受賞し、人類史ブームのきっかけをつくった。続く『文明破壊』(草思社 2005 年)では環境破壊の適応力が文明の岐路をなすと主張している。

## 気候変動問題と環境破壊

1992 年、私がまだブラジルのリオデジャネイロに駐在していた時、国連の決議に基づく気候変動政府間パネル (IPCC) がリオで開催された。「地球の肺」と呼ばれるアマゾンの森林を守ろうとする動きが 183 か国の政府代表

と 103 か国の首脳を集め (宮沢総理大臣は不参加)、20 世紀を規定した「イデオロギーの世紀」「石油の世紀」「大量生産、大量消費、大量廃棄」からの訣別と「地球環境安全保障」と「グローバリゼーション」の時代の到来を告げる国際会議だった。先進国はアマゾン森林保護のため、供出金を出すことも合意した。

この機会にブラジルが、環境問題で世界に寄与できるチャンスが到来したように思われたが、むしろ最近の報道では、アマゾンの森林を不正に焼く動きがあるという。

感染症の歴史をみても、農業が生活の中心となり、共同生活を始めた時に、その起源があるとする意見が見られたし、その後の都市の発展、航空機の発達などで、人類の交流が深まったことにより、その影響が強まったのではない。程度の差こそあれ、「グローバリゼーション」が避けられないとすれば、他国からのウイルスの感染は避けられないであろう。自然環境を守り、ウイルスと共存・共生しなければならない時代の到来である。



ベネズエラ伊藤忠を中南米総支配人として訪問  
(写真はすべて執筆者提供)



リオデジャネイロに室伏伊藤忠商事社長を迎えて



メキシコのサリーナス大統領と NAFTA 発効と  
日本との貿易拡大について議論

## 豊かで、恵まれた国の汚職体質

人類史の観点から見ると、未知の病であった天然痘の侵入とインカ帝国の崩壊は、その後のラテンアメリカ全体の発展に大きな影を投げかけてきたように思える。マゼランが「世界は一つ」を実証し、コロンブスが「アメリカ大陸」を“発見”して以来、ラテンアメリカは西欧（特にスペインとポルトガル）の支配下におかれ、ボリビアのボトシの銀鉱山開発などにみられるように、搾取される対象になってきて、国家を支配する多くのリーダー（全てとは言わないが）が、征服者やその子孫として、国のためよりも、自らに、または身近な人たちのために、利益を優先する統治を行ってきたように思われる。それに引きかえ、北アメリカへは、自らの新天地を求め、定住する気概で大西洋を渡ってきた人たちが国造りを始めたのではなかったか。

20世紀は戦争の世紀と呼ばれているが、幸運なことにラテンアメリカはその埒外に置かれ、豊かな時代を過ごすことが出来た。その後、ラテンアメリカは、自らの資源（石油・銅など）を国有化し、自国の発展を目指したが、こうした活動が、資源を掘るだけで利益を生み出す、不労所得を生みやすい構造であるがために、汚職の蔓延を増長させて来たように思われる。



チリのパトリシオ・エイルウィン大統領と日本・チリ貿易拡大について意見交換

NAFTA（北米自由貿易協定）締結などで活躍したメキシコのサリーナス大統領も汚職の疑いで亡命生活を送っていると聞く。ブラジルでの汚職も後を絶たない。ルーラ元大統領も賄賂と資金洗浄を理由に有罪判決を受けている。ブラジル石油公社をめぐる贈収賄操作で明らかになったのは、ラテンアメリカ最大の建設業者のオデブレヒト社が、2006年から14年までに支払った汚職の総額は3,630億円、贈賄先リストには政治家200人以上が記載されている。しかも、こうした動きはブラジルのみに留まらず、アルゼンチンをはじめ、ラテンアメリカ各地の政界有力者買収にも及んでいると言われている。さらに驚くべきは、多くの人たちを殺害しながら、清廉潔白のクリスチャンと呼ばれ、17年間も権力者の地位に座り続けたチリのピノチェト将軍のことである。アジェンデ政権下で国有化された企業数百社が、彼によって民営化され（ただし銅鉱山だけは国営のまま）、多くの犠牲者を出したにも拘わらず、「シカゴ・ボーイズ」を起用して経済改革が上手くいったと言われている。ところが、後に米国上院で将軍が3,000万ドルもの隠し金を持っていたことが明らかにされたのだ。

## ラテンアメリカと日本

1970年代、2000年代の2回にわたるラテンアメリカ駐在、とくにブラジル人の社長の下で、同社の役員として働く貴重な経験は、私にとって実りの多い月日であった。ラテンアメリカに住む多くの人々の明るく、人懐っこい人となりにより深い親近感を覚えた。こうし

た人たちが少しでも豊かで幸せな生活をエンジョイして欲しいと願うばかりである。

既に述べたように、インカ帝国崩壊後のラテンアメリカ全体を俯瞰するに、期待されながら、満足できるような足跡を残したようには思えない。過去の感染症の歴史を振り返ってみると、必ずその後大きな変化が現れている。今回の災害の後、我々日本に住む者にとっても大きな変革が必至と思われるが、ラテンアメリカも改革が必要であろう。この機会にお互いに手を合わせ改革・発展、そして両国の親善を深めるべく努力すべきだと思う。

かつて、多くの日本人が移民としてラテンアメリカに受け入れてもらった時代があった。今は少子高齢化も進み外国人労働者の受け入れ（政府は移民という言葉は使いたがらないが）を進めようとしているのなら、日本から移住していった日系人やその親族・子孫を真っ先に受け入れるべきではないか。

日本政府がおそろおそろ日系人だけに門戸を開いたことはあったが、長期的制度として、受け入れ制度も不十分なために問題もあった。これからは彼らを移民として受け入れ、安定的に日本に永住できる体制を考えるべきではないか。

私がラテンアメリカの人とお付き合いした人々の中には、フジモ



東京都内の中学校で地球の裏側から見る必要性を講義

リペルー大統領や、シゲアキ・ウエキ、ブラジル鉱山動力大臣、パウロ・ヨコタ、ブラジル中央銀行理事などがおられるが、いずれの方も艱難辛苦の末に成功されている。そこにはスペインやポルトガルからの、いわば征服者、指導者の中で、誠実に筋を通して事を達成していく苦勞があったことだろう。

### 文化交流の必要性

戦後、日本は経済最優先、「追いつき、追いこせ」の生活を続けてきた。それは通商第一主義で、文化交流や青少年同士の交流にあまり意を用いてこなかったと思う。15年前、日本・メキシコ自由貿易協定が結ばれた時、貿易だけでなく文化的交流も深めるため「第1回日墨文化サミット」がメ

キシコの国立博物館で開催され、翌年は石川県の金沢21世紀美術館で開催され、筆者も参加の機会を得た。これは経済人にとっては貴重な経験であった。日本の持つ伝統文化やアニメと壁画やラテンミュージックなどにみられるラテンアメリカとの交流は、お互いにとって新しい生き方を探る上で力を与えてくれるように思える。

コパカバーナ海岸で一つのボールだけで多くの若者がサッカーに興じている姿、一年の稼ぎを衣料などにつぎ込んで騒ぐカーニバルの踊り子たち、彼らは我々が考えているよりずっと幸せな人生を送っているかも知れない。「すべての遊びは、何にもまして一つの自由な行動である・・・文化は遊びとして始まるものでもなく、遊びから始まるものでもない。遊びの

中に始まるのだ」「遊びは人間の根源的な行動であり、これが祈り、そして神に繋がっている」としたオランダ人ホイジンガの書『ホモ・ルーデンス』（遊ぶ人－中公文庫2019年）が、こうした問題を考える際の参考になると私は考えている。

（こうさか せいぞう 公益財団法人 日本漢字能力検定協会 会長兼理事長。元伊藤忠商事常務取締役、中南米総支配人）

## ラテンアメリカ参考図書案内



### 『移民と徳 ー日系ブラジル知識人の歴史民族誌』

佐々木 剛二 名古屋大学出版会  
2020年2月 390頁 6,300円＋税 ISBN978-4-8158-0978-2

サンパウロの「ブラジル日本移民史料館」に収蔵されている数万件の資料が伝える日本人移民の記憶の中から、日本移民の知識人たちが展開してきた多様な実践を1908年から21世紀初めに至る間の移民という状況の中で形成された知識、道徳のあり方に目を向けることで、これまでのアイデンティティやエスニシティに留まらない移民の人々の行為主体性を理解しようと、サンパウロにおけるフィールドワーク、歴史的民族誌調査を通じて試みた研究書である。

日本帝国主義時代に故郷から押し出されて移住した日本移民の1920年代から40年代の知識人形成期、移民的徳が誕生した第二次大戦の戦前・戦中と戦後の勝ち組負け組闘争、戦後いち早く再開した日本の移住政策、移民社会の混乱期から安定期への移行、70年代後半に至る間の移民知識人グループの雑誌発行や研究会結成などの活動、80年代から本格的になったデカセギ移住とサンパウロにおける日系旅行社、邦字新聞社が大きな役割を務めた社会的プロジェクト活動、これらを考察することにより分かる日系移民社会に生じている形態学的変化、巨大な政治的祭典となった2008年のブラジル日本移民百年祭において移民が固有の徳の体現者として構築したことを詳細に記述し、終章ではそれらを振り返りながら移民をめぐる政治・知識・徳というテーマに理論的検討を行っている。著者は日系移民史、日系文化の研究者で、現在慶應義塾大学SFC研究所上席研究員。

〔桜井 敏浩〕